

日本における韓国語学習・教育の問題点

韓国語テキストの比較

桂 正 淑

【要旨】日本の大学における韓国語教育は、戦後天理大学で始まった。近年日韓の交流の増加や空前の韓国語ブームなどにより1970年代7校であった韓国語講座の採用校は2003年には335校に増加している。しかし日韓の歴史的な背景もあり、日本の大学では“韓国語”を表す際にさまざまな名称（朝鮮語、韓国語、ハングル語、コリア語など）を使用している等、他の外国語に比べて特殊性もある。ここでは、日本における韓国語教育の現状、韓国国内における「外国語としての韓国語教育」に関する研究成果、および日本における韓国語教育の問題点を検討しながら、現在日本で出版されている韓国語教材の比較・評価、それらを通じた日本の大学における韓国語学習の問題点を考察する。

【キーワード】韓国語学習、韓国語教育、朝鮮語教育、韓国語教材、韓国語教育の問題

1 はじめに

日本での韓国語教育は日韓の盛んな交流を背景に順調に伸びてきたように見える。韓流という新造語が代弁しているように、最近の韓国に対する日本人の関心は高まりつつあり、その結果として韓国文化や言語に対する幅広い分野での交流が行われている。しかし、実際、大学で第二外国語として韓国語教育の辿った道のは順調であったとは言い難い。今でこそ、全国で50%弱の大学で採用されているが1970年代初め頃は第二外国語としての韓国語はきわめてマイナーな立場であった。本稿では日本の大学における韓国語学習・教育の問題を現在出版されている韓国語のテキストを中心に考えることにする。

2 日本における韓国語教育

韓国と日本の歴史的、地理的な緊密性にもかかわらず日本の大学での韓国語教育が、第2外国語として一応の地位を得たのはごく最近のことである。日本の大学では第二外国語として、主にフラ

ンス語やドイツ語、スペイン語といった欧州の言語が、あるいは近隣国では中国語が採用されてきた。

下記の表は日本国際文化フォーラムの2005年報告書から抜粋した2002年日本の4年制大学において実施された外国語講座の数および比率を表したものである¹⁾。2002年の時点で韓国語が第二外国語としてほぼ半数の大学で採用されたことがわかる。しかし半数近くに達するまでになったのは最近のことで1990年代中盤には採用率は全体の四分の一程度であった。

2.1 今までの歩み

戦後日本での韓国語（朝鮮語）教育が始まったのは1950年天理大学の文学部に朝鮮語・朝鮮文学科が設置されてからである。しかし、1970年代になっても一部朝鮮語を専攻として提供している外大を除いては、韓国語の教育を提供していた大学はわずか8校であった（駒沢大学、亜細亜大学、桜美林大学、上智大学、大東文化大学、日本大学、国学院大学、愛知大学²⁾）。しかも愛知大学においては随意科目として開設され、韓国語履修単位は

表1 四年制大学における外国語教育の実施状況 2002年

外国語	私立	国立	公立	合計
英語	509 99.4%	95 96.0%	73 97.3%	677 98.7%
ドイツ語	424 82.8%	95 96.0%	58 77.3%	577 84.1%
中国語	422 82.4%	88 88.9%	58 77.3%	568 82.8%
フランス語	403 78.7%	88 88.9%	52 69.3%	543 79.2%
韓国語	234 45.7%	58 58.6%	30 40.0%	322 46.9%
スペイン語	173 33.8%	44 44.4%	23 30.7%	240 35.0%
ロシア語	113 22.1%	54 54.5%	22 29.3%	189 27.6%
ラテン語	64 12.5%	33 33.3%	6 8.0%	103 15.0%
イタリア語	72 14.1%	18 18.2%	9 12.0%	99 14.4%
アラビア語	28 5.5%	12 12.1%	4 5.3%	44 6.4%
その他	102 19.9%	33 33.3%	6 8.0%	141 20.6%

表2 四年制大学における開設校の割合変化：1995—2003年度

年度	私立		国立		公立		四年制全体	
	学校数	韓国語開設校	学校数	韓国語開設校	学校数	韓国語開設校	学校数	韓国語開設校
1995年	415	100 24.1%	98	25 25.5%	52	18 34.6%	565	143 25.3%
2000年	478	187 39.1%	99	46 46.5%	72	30 41.7%	649	263 40.5%
2001年	496	204 41.1%	99	49 49.5%	74	32 43.2%	669	285 42.6%
2002年	512	234 45.7%	99	58 58.6%	75	30 40.0%	686	322 46.9%
2003年	526	243 46.2%	100	58 58.0%	76	34 44.7%	702	335 47.7%

卒業単位として加算されない非常に肩身の狭い立場であった。

しかし1984年にNHKがラジオやテレビで「アンニョンハシムニカ・ハングル講座」を開いたこ

とや1988年のソウルオリンピックで始まった一時的な韓国語ブームなどにより、一般市民の韓国語への関心が向上していった。また徐々に増加してきた日韓の交流や2001年センター試験への韓国語

の追加、2002年ワールドカップの共同開催や昨今の韓国映画やドラマブームなど一連の出来事により、韓国のポジティブなイメージが日本の社会に広まり、定着した。

2.2 統計に見る韓国語教育現況

表2は国際文化フォーラムが今年（2005年）発表した日本国内の四年制大学における韓国語開設の割合変化を表した統計である。

この表から見てわかるように1995年に韓国語講座を提供する大学は143校、全体の割合で25.3%であったものが、2003年度には335校、47.7%にまで増加している。これはわずかに10年に満たないうちに韓国語を学べる大学の数が2倍以上増えたことを表すと同時に、韓国語の第2外国語としての地位がはっきり確立しつつある証拠と言えよう。

また2004年には北海道文教大学をはじめ9校が、2005年には福島大学および神戸商科大学が、新たに韓国語を開設するなどその後も順調に伸びているのがわかる。

3 韓国の外国語としての韓国語教育研究現況

韓国国内において「外国語としての韓国語教育」の歴史はまだ浅いと言える。韓国では外国人が韓国での宣教のために使った韓国語教材や、数少ない留学生向け教材などは存在していたが、1980年代においても、韓国語を体系的に学べる機関はソウル大学、延世大学の語学堂くらいであった。

しかし、留学生（短期語学研修生を含む）の急激な増加や一般にキョポ（橋胞）と呼ばれる海外居住韓国人の韓国語教育に対する認識の変化、外国人労働者の受け入れなど、ニーズの増加や多様化を受け、国内でそのニーズにこたえる為の機関および研究が盛んにおこなわれるようになった。

3.1 政府レベルでの努力

この流れを受け2001年2月に政府傘下機関として、韓国語の海外普及と「外国語としての韓国語」

の教育提供を目的として「韓国語世界化財団」が発足した。

ホームページ<http://www.glokorean.org/>

すでにハンゲル学会など国語研究機関は多く存在していた。しかし、それはあくまでも韓国語を国語として研究し保存・発展させていく機関であって、韓国語を外国語として意識し世界に向けて韓国語関連情報を発信していく姿勢を表明した機関ではなかった。

「韓国語世界化文化財団」の主な事業内容は、韓国語の国外普及事業、外国人勤労者を対象にした韓国語教育、韓国語情報管理センターの運営、デジタルハンブル博物館の構築、100大ハンブル文化遺産の選定および管理である。

「韓国語世界化財団」の活動における注目すべき活動の一つとして、韓国語国外普及事業の一環で実施されている韓国語教育認定試験が挙げられる。これは（外国語としての）韓国語教師養成体系の公共性を確立するため、国語基本法施行令に基づき実施される試験で、2002年11月に第1回目が実施され、2003年からは東京でも受験できるようになった（2005年は新国語基本法施行領公表により実施機関が変更になる見通し）。

これは、韓国語教育機関が国内外に急激に増えたことで、量的増加に見合う質の向上を図るための動きと解釈できる。今まで外国語としての韓国語教育は、公的教育機関のみが担ってきたが現在、急激に増えたニーズにこたえるべく韓国語教育を提供する私的機関も増えている。そのため韓国語教員の資質にもばらつきが出てきている。そのことへの反省から教員選別の公的ガイドラインが示されている。なにより韓国語を母語としている者が誰でも教員になれるということではないからだ。

「韓国語世界化財団」においても一つ注目すべき活動はデジタルハンブル博物館の構築である。周知のように最近のインターネットを經由した外国語学習は非常に注目されている。特に韓国語のように、まだマイナーな位置にある言語においてはインターネットを通じて、より多くの学習者に言葉を提供することにより、言葉を身近に感じて

もらえることに加え、最新の研究結果や学習資料を、世界中にいる韓国語教師に、リアルタイムで提供できる点は極めて有用である。一日でも早く使いやすいデジタル博物館の構築が望まれるところである。

3.2 韓国語教育関連研究

又、多岐な分野での韓国語教育関連研究業績も出版された。その主な研究結果を並べてみると、国語教育の強化および南北言語の統一、レベル別語彙調査および語彙目録作成、外国人のための簡略化した標準文法の作成、多様な教育課程(カリキュラム)/教授要目(シラバス)開発、教材開発論、標準評価ツールの開発、有能な教員の養成問題、インターネット韓国語学習プログラム開発、外国人のための標準語辞書・韓国語学習辞書の開発などである。

3.2.1 海外のヘリテージ学習者(heritage learner)

まず海外に居住する韓国人(キョーボと呼ぶ)の韓国語教育の重要性が注目されつつある。海外のキョーボは、大きく分けてアメリカ大陸と日本、中国の朝鮮族の三つに分けられる。

アメリカの韓国語教育で注目すべき点は、韓国人が集中して住んでいる大都会(ロサンゼルスのコリアンタウン、ニューヨーク州フラーシング、ワシントンD.C.など)では、宗教機関である韓国人教会が中心となって、現地生まれの2世3世の子供たちに韓国語教育を提供していることである。しかしこれは韓国人の集中している地域に限られたことであり、全米に浸透しているとは言いがたい。一方で、1996年、SAT IIに韓国語科目が正式に採用されたことで、高校での韓国語科目の開発が急激に増えている。これは韓国系米国人の人口が増えたことに加え、移民1世の韓国語に対する意識が変化し、以前に比べ積極的に韓国語教育に取り組み、地域社会に働きかけた結果とも言える。アメリカの大学で、韓国語講座を受講する学生の多くは韓国系アメリカ人である。プリガムヤング大学を除いた全米の韓国語講座は、韓国系ア

メリカ人受講生が過半数を超えている³⁾。こういった民族的背景を持つ学習者を「ヘリテージ学習者」と言う。

日本のキョーボや中国の朝鮮族は、居住国に独自の学校(たとえば日本にある朝鮮学校や韓国人学校など)があり、そこで韓国語教育が行われる場合が多い。正しい韓国語教育が行われているかはさておき、独自の学校があることにより、日本や中国の大学での韓国語講座には「ヘリテージ学習者」はほとんどいない。

韓国語を「母国語」としながらも韓国語を「母語」としないヘリテージ学習者に関する研究が活発に行われている中、中国の朝鮮族および日本の朝鮮総連系民族学校で教えられている朝鮮語と、韓国やアメリカで教えられている韓国語には、大きな乖離があり、その距離をいかに縮めるかがこれからの課題である。

3.2.2 教材とシラバス、カリキュラム

多様な教育課程(カリキュラム)および教授要目(シラバス)開発論議に関しては、学習者中心の教育(learner centered instruction)という最近の流れが大きく影響したと思われる。

教師から一方的に教育内容を与えられ、学生はそれを学習する受身の存在であるという、いわばトップダウン方式の授業ではなく、学習者の動機を分析した上で学習者のニーズに合わせた教育を教師が提供するオーダー式教育(tailored instruction)、つまりボトムアップの教育が注目されるようになった。それほど学習者のニーズも多様化したと言えよう。

カリキュラムとシラバスは、必修履修科目だからという理由での学習と、留学を意識しながらの学習、ビジネスのための会話練習、隣国の文化を深く理解するための学習、といった各各の学習の動機に合わせ、設定されるべきである。

教材の開発においては、前述した学習者中心の教育を念頭に、韓国語学習にコミュニケーション能力の向上を重視する教材、つまり、「話す能力」と「聞く能力」を中心とした教材の開発が主流になってきた。

表 3

シラバス	基 本 概 念	韓国語教材との関連性
構 造 シラバス	音韻、文法など言語構造を中心に作成したシラバス。配列基準は難度の低いものから高いもので、頻度の多い順から低い順に、意味機能が簡単なほうから複雑なほうに配列する。	1990年代中盤までの教材が採択した主なシラバスである。
状 況 シラバス	言語活動の行われる場所や状況を中心に作成されたシラバス。食堂で、道で、地下鉄駅で、市場でのように会話の行われる場面を重視する。	最近の一部の教材で中心的シラバスとして採択されている。
主 題 シラバス	各レベルに合わせて採択された主題を一定の基準により配列したシラバスである。状況シラバスとの混合形態に見える。家族、天気、食べ物電話などの例があげられる。	最近開発される韓国語教材で主に採択されているシラバス。
機 能 シラバス	紹介する、説明する、要請する、提案するなど言語活動の機能的側面を中心に作成したシラバス。主に主題シラバスと連携して使用される。	最近開発された教材でたまに採択される。
概 念 シラバス	もの、時間、距離、関係感情、容姿等のように実生活関連主要概念を中心として作成したシラバスである。有用性が親密度により配列する。	時には主題シラバスの一部が含まれたりする。
機能基盤シラバス	大義把握、主題把握、話し手の意図把握、推論する等のように言語機能中、特定の機能を中心に配列したシラバスである。	主に理解機能でこの分野の教材が極めて少ないため現在まで採択された事例を探し出せない。
課題基盤シラバス	指示に従う、手紙を書く、面接に望む、申請書を作成するなどのように実生活課題中心に配列したシラバスである。	主題シラバスとともにたまに採択されている。
混 合 シラバス	二つ以上のシラバスを活用し作成したシラバスで、最近のほとんどのシラバスがこれに属すると言える。	最近開発される教材等が主に採択している。

チョ ハンロクは教材の開発とシラバスの関連を次のように分類し、最近の傾向として言語と文化の統合的教育を考えて文化シラバスも追加するべきであると書いている⁴⁾。

3.2.3 教材の選択基準

次は良い教材とは何か、教材を選択する際に考慮すべき点は何かについて考える。キムソンジョン外は理想的な教材とは、学習目標がはっきり提示されていて、その目標を達成するための教授法と学習方法がきちんと反映されている教材であると指摘した⁴⁾。

さらに外国語としての韓国語教育に相応しい教材選びの基準を次のように提示している。

- 韓国語の体系と語法をわかりやすく提示している教材
- 言語の機能（読む、書く、話す、聞く、）の練習において学習者が楽しく学べる教材
- 韓国文化の特徴がよく紹介されている教材

●韓国の現実と符合する教材

また教材選択時に考慮すべき事項としては次の4項目を挙げている。

- 学習対象者（学習者の韓国語の学習能力、年齢、言語的・社会的背景）
- 学習者の韓国語学習の目的
- 学習予定期間
- 教師の指導嗜好

3.2.4 そ の 他

レベル別語録の作成や語彙集の作成は、センター試験やSAT IIの採択で、更なる重要性が高まったと言えるが、そもそも学習の対象になる外国語として基本的に備えるべき資料である。

外国人のための標準文法の作成の論議も多く発表されている。世界各国で教えられている韓国語の文法や文法用語は統一されていない。学習者の母語と照らし合わせての学習が効果的であることは確かであるが、日本国内で発売されている韓国

語教材でさえも統一されていない。そのため、万一初級と中級で使う教材が別の作者によるものだった場合、学習者は中級教材に入る前に再度文法用語を習い直す必要がある。

世界各国で独自に作られる教材の作成において基準となる簡潔な標準文法を韓国国内で確立するのが待たれる。また外国人のための標準語辞典、韓国語学習辞典などの開発も指摘されている。

効果的なインターネット韓国語学習プログラムの開発や段階別標準的教科課程を開発することと標準評価システムの開発は平行して進めていくべき課題である。

以下は、現在インターネット上で韓国語学習のできる代表的なサイトのリストである。

<http://teen.korean.com>

http://www.dorean.net/language/language_index.jsp

<http://korean.sogang.ac.kr>

<http://arts.monash.edu.au/korean>

http://jsis.artsci.washington.edu.progrmams.easc/korea_studies_.html

<http://www.fas.harvard.edu/~korea>

<http://www.kankoku.gr.jp>

4 日本での韓国語教育の問題点

日本での韓国語教育は、軌道に乗ったばかりと言っても過言ではない。もちろん外大の朝鮮語研究科等で、韓国語に関する研究は、なされてきたが限られた専門的な分野での研究と言った印象が強かった。何より韓国語に関する論文が量的にまだ多くなかったために、まとめて掲載する専門の掲載先が少なかった。朝鮮語関連研究の学術論文集は、最近まで『朝鮮学報』一紙だけであった。

そのため、今まで発表された韓国語関連研究は、研究者が所属先の学術論文集に発表するものか、または韓国関連の学術雑誌に発表する場合が多かった。2002年に朝鮮語学会から『朝鮮語研究』と言う学術論文集が本として出版された。『朝鮮学報』と並行し、これから多くの韓国語教育に関

する論文の発表が期待されているところである。

韓国での研究結果をいくつか紹介したが、現場で教えている立場の筆者としては、自らの経験を基に今まで韓国語学習および教育の問題点を考え、これからの韓国語教育の改善の参考になればと思う。

外国語教育の三大要素が学習者、教材、教師であるとするならば、最近出版された韓国語教材を比較、分析しながら現場でこれらの教材が実際使われることを想定し、その適用を考えてみるのは有意義なことであろう。

日本での韓国語教育の現状に関しては、野間秀樹、菅野博臣、長谷川由紀子などが韓国国内で論文を発表している。韓国国内で発表される「外国での韓国語教育」の現状は、キョーポ研究者もしくは、現地にて教育に携わっている韓国人によるものが大半だが、日本からは日本人研究者によるものが断然多い。最近のトレンドではありながら、それだけ研究が活発になったと言う証拠である。

まず韓国語教育を取り巻く外的問題と内的問題から入っていく事にする。

4.1 外的問題

ここで外的問題というのは日本国内での問題ではなく、日本以外、主に学習対象になる韓国で起源した問題を指す。

4.1.1 汎用教材

日本に限らず、現在急速にニーズが高まっている中国やベトナム、オーストラリアでの韓国語教育においても、韓国国内で蓄積された研究成果および開発した教材などが共有できていない状況である。学習者の母語の特徴を把握し、母語と学習対象語を照らし合わせて考えられた学習法は、効果的であることは言うまでもない。教材開発において、日本では300種類以上の韓国語教材が出版されている。しかし、まだニーズの少ない国や発展途上国など自力で教材開発が難しい地域で使える汎用教材の開発は至急解決すべき問題であるが、まだその開発にまで手が回っていないのが現状である。

4.1.2 母語別エキスパートの養成

汎用教材の開発と同時に、学習者の母語別韓国語教育のエキスパートの養成も必要である。韓国国内では、韓国語の学習者に対して母語別の教育はなされていない。たとえば日本人にとっては、何の問題もない斗と斗の発音の区別についても、英語圏の学習者においては、繰り返しの発音の練習が必要である。逆に日本人には区別が難しい口, ㄴ, ㅇについては、英語圏の学習者には容易に区別が付く。また、中華圏や日本からの学習者に対し漢字の書き方を教える必要はほとんどないが、それ以外の国の学習者に対して漢字を教えるに当たっては、その学習者がある程度上級レベルに到達している必要がある。

韓国国内においては、教師が韓国語だけを使い世界各国からの学生を教えることは可能である。なにより教室だけではなく、生活全般が韓国語学習環境であるからである。しかし、このような教授方法で韓国以外の国で成果を挙げることは難しい。ベトナム語や日本語、中国語など学習者のそれぞれの国の言葉の特徴を深く理解した上で、韓国語の特徴と対象国の言語との違いを、わかりやすく解説するなどの教授法を作りあげることが大切である。しかし母語別エキスパートの養成までには、まだまだ時間がかかりそうだ。

4.1.3 맞춤법 (正書法)

また日本語の正書法に当たる맞춤법이悩ましい。この맞춤법은何回か改正されている。原則として「標準語を、発音通りに書くが、語法に添う形で」となっている。しかし一般大衆が使いやすいように工夫されたはずの맞춤법이、実際に適用しようとする時、韓国語を母語としている韓国人にとっても難しい場合がある。「分かち書き」の基準は確立しているものの、例外やどちらも認める場合も多くあり、毎回辞書をしらべる必要が出てくる。また漢字語や固有語をくっつけた複合語や漢字語同士の複合語、固有語と固有語の複合語に入を入れるか入れないかについても議論となっている。

例 회집/회집 화병/화병 혼자말/혼자말

一般的に下線が正しいことになっているが、母語話者にこの問題を聞いても解答に悩むところであろう。

日本語にない「分かち書き」も理解しづらい。規則が細かく決められすぎており、迷う場合がある。たとえば

역사상 가장 위대한 인물

歴史上一番偉大な人物

의상 (上) は歴史に付ける。しかし、

IMF체제 하에서

IMF体制下で

의하 (下) は体制には付けない⁵⁾。

日本の大学レベルではここまでの学習は行わない。しかも、最近の言語教育は文法的に間違いであっても、意思疎通が図れるようになる方を優先する。しかし、外国人にとって、使いやすくなりやすい、標準正書法の確立を、海外で教えている立場の一人として、筆者は望んでいる。

4.2 内的問題

4.2.1 朝鮮語かそれとも韓国語か

欧米においては朝鮮語か韓国語かとの名称問題は存在しない。しかし日本においては歴史的背景から「朝鮮語」と呼ぶべきなのか「韓国語」と呼ぶべきなのかの議論がある。筆者も、ここで時には「朝鮮語」、時には「韓国語」と分けて書いているものの、「朝鮮語」にしても、「韓国語」にしても表現や単語の選択でちょっとした差はあっても根本的には同じ言語であると認識している。

今までの経緯を整理すると、日本では朝鮮半島で使われている言語を総じて「朝鮮語」とし、朝鮮学会、朝鮮語研究会のように一般に「朝鮮語」と認識されてきた。しかし、「韓国語」と呼ぶべきと主張している側は、日本で使われている「朝鮮」という用語に差別的含意 (connotation) があるほか、日本では朝鮮半島と呼ぶが、韓国では韓半島と呼ぶなど、「韓」という文字で北と南の両方をカバーできるとして「韓国語」と呼ぶべきだと主張している⁶⁾。

何とか中間点を探そうと一部では「ハングル」

または「ハングル語」と知恵を絞っているものの、「ハングル」とは文字を指す呼び名であって「ハングル語」と呼ぶのはふさわしくないと否定する声も多い。最近では代案として「コリア語」という名が出現している。『2005年度国際文化フォーラム通信』によると4年制大学での科目名は次のようになっている。

表 4

科目名	割合
韓国語	33.4%
朝鮮語	27.8%
ハングル	14.3%
コリア語	7.8%
韓国・朝鮮語	5.7%

日韓の人的・文化的交流の活性化や韓国語の母語教員の殆どが韓国出身であることから現状「韓国語」という科目名が多く採用されている。

4.2.2 韓国語教員

2003年度現在、4年制大学のうち335校で採用されている韓国語であるが、日本国内で韓国語の専攻大学院課程のある大学は東京外国語大学と大阪外国語大学の二校のみである。ニーズの急増に対応できる教員の数が不足していることの要因である。野間秀樹によると韓国語を母語とする教員と日本語を母語とする教員の比率は4:3となっている。つまり日本においては、韓国語学習者が韓国語母語教員に接する機会は、比較的に多いと言える。

良い韓国語教員の条件について野間秀樹は次のように書いている⁷⁾。

●韓国語学ないしは韓国語教育について深い知識のあること

●日本語について深い知識を持っていること

“なぜなら日本語母語話者である学習者に、韓国語学習上の多くの問題は、発音に関する問題を別にしたら‘日本語でこんな場合こういうのを韓国語ではなんと言うのか’または‘この韓国語は結局日本語にしたら何に当たるのか’と言う命題に帰着するからである。”

この二つの条件を満足させるには教員に韓国語教育のバックグラウンドが必須となるが、残念ながら必ずしも韓国語教育を専攻とした教員が、韓国語を教えているとは限らないのが現状である。前述したように、韓国にはまだ母語別韓国語教育の専門家が大量に育成されておらず、韓国語教育のために韓国人が日本に来てまで研究する必要性はないのである。

日本語を母語とする教員には、自分たちが過去学習者であったために、外国語として習う韓国語の難しさを理解している。学習者が経験する壁を自ら経験し、それを乗り越えた立場である。そのために、学習者に対し、何が必要であるかをよく把握している。理想としては韓国語母語教員と日本語母語教員がチームになって教える形であるが、なかなか実現は、難しい。

4.2.3 学習者と授業時間および共同カリキュラム

日本人にとって、語順がほぼ同じであり、同じ漢字文化圏に属しているため語彙も似ていることから、韓国語は他の外国語に比べ習いやすいという。そのため、韓国語を選択している学生も多い。大学によっては、ほかの外国語の定員がいっぱいになったために、韓国語に割り当てられたという場合もあるという。

韓国語は、欧米語に比べて習いやすいというのは否定できない。しかし、英語は中学校から学習してきているため、フランス語やスペイン語など発音や文字で英語と相違点はあるが、アルファベットを覚えるに比較的苦労はしない。

一方、韓国語は、いまでこそ手軽に韓国関連の情報が手に入るようになったものの、韓国語や韓国文字は見慣れない言語である。初級学習者の直面する問題について、長谷川由起子は次のように書いている。

“韓国語は全体的に見て日本人には習いやすい言葉であるに間違いはないが、入門段階である文字と発音だけはそうでないようだ。日本人にとってハングルは見慣れない記号であるだけじゃなく日本の文字であるカナでも、慣れ親しんだローマ字

でもその音を写し書くのが難しい上、発音ときたら母音も子音も日本語よりはるかに複雑な体系を持っているからである⁸⁾。”

このように見慣れない文字を新たに習うのにもかかわらず、大学での韓国語講座は週一回か二回の授業になっている。一回あたり授業時間を90分とし、週二回、年間28週と計算した場合、年間の授業時間は最大で84時間になる。韓国の梨花女子大学が提供している3週間短期プログラムが週20時間授業で合計60時間を組んでいることからすると、韓国での3週間の授業は日本の一学期半に相当する。

また、大学において指定している教材がなく、担当の教員の裁量に教材の選択が任されている中で担当教員が一年目と異なる場合、学習内容や文法用語などが教材により異なるために無理が生じる。これらを防ぐための共同のカリキュラムを作り上げる必要がある。

4.2.4 教授目標

このように限られた時間の中で、何をどう教えるかが、教える側に課題になってくる。教室を離れると、韓国語に親しむ環境がまったくない日本で、週1—2回の授業でどこまで韓国語が伝わるのか、悩むところである。言葉を学ぶとはただ言語を学習することだけではなく、そこに溶け込んでいる文化や価値を経験することでもある。しかし限られた時間の中で、文化を教え、読み、書き、の能力や会話の能力、聞く能力を身につけさせようと目標するのは現実的ではない。そのために、どうしても大学での1年間の授業は、評価が比較的容易である読み、書きに重点を置くようになる。筆者としては、学生一人一人に韓国語学習の基礎を身に付けさせることで、後に何人か韓国語にさらに興味を持った学生が、自力で学習に進んでいく土台をつくってあげることが目標にしている。

5 韓国語大学教材の分析

韓国文化院が所蔵している韓国語教育の書籍は、韓国語学習と言うタイトル検索で216冊、朝鮮語

学習で56冊に上り、新刊も次々と出版されている。しかし、大学で教えることを前提に出版されたテキスト本も多くあるが、これといった一冊がない。何よりワークブックが少ない点が問題である。

初級用の教材は多く出ているが中級、上級になっていくと段々少なくなっていく。また学生のレベルをテストする評価教材が少ない。前述したように韓国では、4つの機能の一つに統合した教材の開発が進められている。教室以外の場所で、韓国語や韓国文化に接する機会を殆ど持たない韓国以外の国の学習者には、統合教材が必要である。それでもこれだけ多くの教材が日本で出版されている中、日本人学生の陥りやすいミスを補完するため (Remedial) のワークブックが見当たらないのは意外である。

筆者はここで1995年以降出版された、大学で使われることを前提した韓国語テキストを選び分析した。以下の11冊を参考にしたが便宜上、略称をつけることにする。

金東漢・張銀英『改訂版韓国語レッスン初級Ⅰ』

(以下「レッスン」と呼ぶ)

厳基珠外『韓国語の初歩』(以下「初歩」と呼ぶ)

油谷幸利・コヨンジン『実用韓国語』(以下「実用」と呼ぶ)

金賢信・金菊熙『Kim & Kimのハッピー・コリアン』(以下「Kim & Kim」と呼ぶ)

渡辺鈴子『日本語と照らして学ぶ韓国語基礎』(以下「照・学」と呼ぶ)

油谷幸利・南相瓊『総合韓国語1』(以下「総合」と呼ぶ)

長谷川由紀子『コミュニケーション韓国語 読んで書こう1』(以下「コミュニケー」と呼ぶ)

高島淑郎『書いて覚える初級韓国語』(以下「書・覚」と呼ぶ)

入佐信宏・文賢珠『よくわかる韓国語 STEP 1』(以下「よくわかる」と呼ぶ)

●韓国で出版されたテキスト

梨花女子大学言語教育院『Pathfinder in Korean 1』(以下「Path」と呼ぶ)

カナダ韓国語学院 (姜奉植訳)『日本人のための

カナダ韓国語 1 初級』(以下「カナダ」と呼ぶ)

5.1 ハングルおよび発音

殆どのテキストにおいて、韓文字を教える順番は一致している。母音を先に学び、次に子音を学ぶ。さらに二重母音(合成母音とも呼ぶ)やバッチムまたは濃音を学ぶ順である。ここで注目すべき点は韓国人によるテキストには、母音の順番を韓国で教えている順に並べていることに対し、日本人による本には順番が変えられていることである。

韓国語の基本母音には日本語の基本母音である“え”が欠けている。また二重母音の“야”“여”“요”が基本母音になっている。そのために並び方は著者により異なるが、多くの場合、“え”を加えた基本母音を先に学習させ、次に二重母音を教える形をとっている。この方が日本人学習者に理解されやすいからであろう。

また、日本人によるテキストは、発音や文字の習得に多くの時間を割いている。韓国語の体系を日本語母語話者に理解してもらうには、相当な時間が必要である。韓国語の文法や表現を熟知していても日本語の韓国語表記を誤る学習者が多くいるのが目立つ。例として井上という名字を韓国語表記してもらった場合、“이너으애”(正しくは이노우애)と書く学生が多い。これは下記の表に書いてあるように、日本語の音素に対照する韓国語音素が一つ以上あるために、学習者が混乱してしまった結果である。

表 5

日本語音素	対照する韓国語音素
う	으 우
え	에 예
お	오 어
ち	치 지 찌
っ	츠 즈 찌
いえ	애 예
うえ	왜 웨

混乱を避けるために、日本語表記“う”は“으”“え”は“에”“お”は“오”だけを用いると付け加えるべきである。テキストにこれをはっきり言及したのは、「コミュニケー」,「書・覚」,「実用」の三冊である。韓国語の表記表と平行して日本語のカナを韓国語で表した反切表を載せることは、韓国語表記の学習に役立つと考えられる。

発音記号は、それぞれのテキストで違う表記を採用しているが、日本語のカナにもローマ字にも表記しにくい韓国語をできる限りカナを用いることなく、かつ学習者にわかりやすく説明するために、次のような試みがある。「Kim & kim」および「わかりやすい」では「失礼します」の韓国語訳の発音を次のように提示している。“시1레함ニダ”。日本語の発音にない“의”の表記もそれぞれ異なることから、学習者が必ずしも熟知しているとは限らない発音記号を使うよりは、上記の発音の提示は有効的と考える。

また、発音の練習にも時間をかけてゆっくり慣れさせる必要がある。濃音と激音を聞き分けることや有声音化、連音化、口蓋音化、激音化、舌側音化、鼻音化など、日本語にはないこれらの発音のルールに慣れるには、相当な練習が必要となる。「わかりやすい」がテキストの中で説明が必要になった際、その都度発音の説明を加えている以外は、その他のテキストは初めの段階からまとめて整理し、一挙に提示している。

5.2 文法構成および難易度

外国語のテキストにおいて、文法の構成は、難易度の低いものから高いものへ進んでいくことになっているが、実際何が学習者にとって習いやすく、何が難しいかは容易に判断できない。したがって、文法の構成はテキストの作成者の個性がもっとも強く出ているところである。

多くのテキストは韓国語での自己紹介を導入した後に、活用の様相がほぼ一致していることからこれ/それ/あれ/どれに当る이것/그것/저것/어느것を出発点として採用している。「初歩」,「レッスン」,「書・覚」,「よくわかる」,「コミュ

ニケー」, 「Kim & Kim」)

しかし、動詞の導入は、各テキストにおいて大きく異なる。「カナダ」は文字や発音の練習が終わった時点で、いち早く動詞の活用を詳しく取り扱っている。「総合韓国語」では発音の説明と平行して動詞の活用が提示されている。この2冊を除いては動詞の活用は13週目前後に配置されている。

日本で出版された大学教材のレベルは均等ではない。週一回か二回の授業で、これだけの内容を吸収してもらえるものかと、疑問を抱いてしまうテキストも少なくない。毎課学習する単語が多くは40個以上になる場合も多く、一週間で消化するのは難しいと考える。

5.3 汎用教材VS地域中心教材

韓国で出版されたテキストは汎用教材の色が濃く、日本で出版されたテキストは日本での教育を念頭において作られた地域中心教材になる。「カナダ」の場合、日本語で文法の説明は付いているが、日本向けに製作したのではなく、韓国語のテキストを文法の説明の部分だけを中国語や英語、日本語に翻訳し、それぞれの国用に出版した。

「Path」は韓国で生活している外国人を意識して作られたテキストなので各課の内容が濃密であり、主題別シラバスを採用しているために、単語が主題別に細かく紹介されている。特定の国の学習者を意識した説明などはない。

地域中心の教材は、学習者のニーズに合わせた教材づくりが可能になるため、学習者の韓国語学習における強みや弱みを踏まえた教材を製作できる。たとえば韓国で使われている漢字を日本語と対照して学習する方法は、韓国語の語彙を増やすために非常に効果的な方法である。初歩レベルの学習者であっても、この学習法を使って語彙を大きく増やすことは容易である。「レッスン」, 「書・覚」, 「コミュニケー」, 「初歩」が日韓の同じ漢字語には下線を引くなどして、学習者の注意を促した。特に「コミュニケー」は漢字語において、韓国で使われている旧字体の漢字も併用して

載せるなど細かい配慮が目立つ。

地域中心の教材だと前述したように発音の表記もカナと発音記号を組み合わせた独特な表記が可能になる。

5.4 統合教材VS機能中心教材

多くの教材が統合教材を目指している中、「基礎」が作文主体のテキストとして出版され、「コミュニケー」が会話と読み・書きを分けて個別出版されている。両方とも基本的要素（文字、発音など）は取り入れているが、目標としている機能に徹したテキストになっている。これだけ多くの韓国語のテキストが出版されている現在の状況からして、一つの機能に特化した教材の出版は歓迎されるべきである。これからもドリル集や単語集などの機能中心教材の出版が続くことであろう。

5.5 その他

学生の意欲と期待で始まる韓国語学習を挫折せず続けさせるには、テキストのレイアウトも大事である。教える側が意欲的に多くのことを紹介しても、結局それをどれだけ自分のものにするかは、学習者個人が決めることである。新学期が始まり韓国語教員に会う前に、学習者が先に接するのがテキストである。テキストを開いて学習の意欲が沸いてくるような面白くかつ有用な内容が提示できていなければ、学習の意欲は授業が始まる前に減ってしまうことになる。

もう一つとしては、外国語学習とは、どれだけ多くを教えられるかよりは、どれだけ学習者に理解してもらうかが大事であると考え。意欲ばかりが先行し、多くのことを教えても、学習者が理解できずに止ってしまっただけでは、先に進む意味がなくなってしまう。それどころか、わからないまま進んで行ってしまうと学習の意欲を失い、諦めてしまう場合もある。

そのためにははっきりとした学習目標を掲げ、簡潔な学習内容を示すことが重要である。韓国語の学習意欲がなくならないように楽しく学べる環境を作るうえで、韓国の文化や伝統を紹介するのは

効果的と考える。

6 終わりに

日本における韓国語教育についてここで考察したが、もっと注目すべきは、これからの発展方向である。日韓の交流はこれからもずっと増加していくことになるが、韓国語教育がどの様に貢献していくかが今後の課題になることであろう。

日韓の韓国語教育において注目すべき点としては、韓国での教材開発が、「読む」「書く」「話す」「聞く」の四機能に加え、広意で文化、伝統まで取り入れた統合教材開発へ向かう傾向と、汎用教材の開発に力を入れようとしていることに対し、日本での韓国語教材開発は、機能別目的別の分離教材開発が進められていることである。しかし、一見逆行しているように見えるこの様な動きは決して矛盾しているのではなく、逆に補完的であるといえる。日本で開発されているテキストは、韓国語を学習した日本人と韓国人の共著によるものが多くなっており、日本の学習環境に適した教材の開発が活発化した産物として機能中心の教材の開発にまで至ったとみる。

- 1) 国際文化フォーラム2005年報告書“日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題”
- 2) 陶山信男「韓国語教育の現状と方法」『言語と文化』2 (2000/02), 7-19
- 3) 조 항욱「韓国語教材開発のための基礎的論議—教材類型論的観点から見た教材開発の現状と主要争点—」『韓国語教育』第14巻1号 (2003) 249-278 (韓国語)
- 4) 김 선정・허 용『韓国語教材選択法および学習指導案作成法』『二重言語学』第16巻 (1999) (韓国語)
- 5) ハングル学会
- 6) 小栗章「フォーラム2002日本における韓国語教育の現在」『月刊韓国文化』281 (2003/4), 44-48

- 7) 野間秀樹「日本大学校大学院での韓国語教育—東京外国語大学大学院の教育現況を中心に—」『韓国語教育』第14巻2号 (2003) 83-106 (韓国語)
- 8) 長谷川由紀子「日本の学習者に対する韓国語発音指導法—入門段階を中心に—」『韓国語教育』第8巻 (1997) 161-178 (韓国語)

参考文献

- 季熙卿「言語と文化を統合する韓国語教育方法」『言語文化研究』24巻2号 (2005) 29-51
- 中島仁「現代朝鮮語の言語規範—その変遷と認識度調査を中心に」『語学研究所論集』第7号 (2002) 119-144
- 金東漢・張銀英『改訂版韓国語レッスン初級Ⅰ』スリーエーネットワーク 2003 170P
- 金東漢・張銀英『韓国語レッスン初級Ⅱ』スリーエーネットワーク 2001 195P
- 嚴基珠・金三順・金天鶴・申鉉絃・吉川知丈『韓国語の初歩』白水社2005 141P
- 油谷幸利・コヨンジン『実用韓国語』白水社 2005 142P
- 金賢信・金菊熙『Kim & Kimのハッピー・コリアン』白帝社 2004 100P
- 渡辺鈴子『日本語と照らして学ぶ韓国語基礎』白帝社 2004 85P
- 油谷幸利・南相環『総合韓国語1』白帝社 2001 151P
- 長谷川由紀子『コミュニケーション韓国語読んで書こう1』白帝社 2004 136P
- 高島淑郎『書いて覚える初級韓国語』白水社 2002 129P
- 入佐信宏・文賢珠『よくわかる韓国語 STEP1』白帝社 2002 237P
- 梨花女子大学言語教育院『Pathfinder in Korean 1』梨花女子大学出版部 1998 159P
- カナダ韓国語学院 (姜奉植訳)『日本人のための韓国語1初級』シサエデュケーション 1997 222P

韓国語論文

野間秀樹「韓国語文法教育の新しい展開のために
—特に日本語母語話者のために—」『外国語
としての韓国語教育』第27集（2002）83-101

ホ ヨン・ヨン チェフン・チョン ジンウオン
「遠隔教育を通しての韓国語教育—韓国語教
材開発と教師教育を中心に—」『二重言語学』
第17巻（2000）

Problems and concerns on Korean Education in Japan through the Comparison of Korean textbook.

Kye Jungsook

[Abstract] Postwar Korean Education in Japan started at Tenri University. Being taught at 7 colleges in 1970's, due to gradual increase in cultural and human exchanges, and recent Korean boom in Japan, colleges that provide Korean as a second or a third language courses has increased into 335 in 2003. Unlike other foreign languages, there are more than several names for Korean courses (Chosen-go, Kankoku-go, Hangure-go, Koria-go, etc) which derived from historical background. The current status of Korean education in Japan, Researchs on Korean as a foreign language conducted in Korea, and concerns on Korean education in Japan would be discussed. Also, through the comparison of Korean textbooks published in Japan, the concerns of Korean education would be discussed.

[Key word] Korean Language study, Korean Language Education, Korean Language textbook, Concerns on Korean Language Education.